

検査情報月報



2011
10月

横浜市衛生研究所

平成23年10月号 目次

【トピックス】

残留農薬検査(その2)	1
平成23年度 医動物・種類同定検査のまとめ(7~9月)	4
魚介類中の動物用医薬品検査結果(その1)	7

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成23年9月	8
------------------------------	---

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報(平成23年9月分)	13
-------------------------------	----

残留農薬検査(その2)

当所では、横浜市内に流通する農作物等の食品に残留する農薬の検査を行っています。平成22年度より農作物当たりの検査項目数を追加し、検査体制を一層強化しています。

今回は、平成23年8月から9月末の期間に食品専門監視班より搬入された農作物等の検査結果を報告します。

1 市内産農作物

8月に搬入されたなし(3検体)、9月に搬入されたさつまいも(5検体)及びぶどう(3検体)の計11検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、なし3検体及びぶどう3検体から農薬が検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

2 国内産農作物

8月に搬入されたかぼちゃ(1検体)、9月に搬入されたこまつな及びキャベツ(各1検体)の計3検体について検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、農薬が検出されたものはありませんでした。

3 輸入農作物(冷凍食品を含む)

8月に搬入されたパプリカ及びキウイフルーツ(各1検体)の計2検体について残留農薬検査を行いました。これらの結果を表1に示しました。

その結果、パプリカ1検体から農薬が検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした。検査項目及び検出限界については表2に示しました。

今回の検査で検出された農薬の概要については、3ページからの【農薬解説】を参考にしてください。

表1 残留農薬検査結果

(H23年8月～H23年9月末)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
市内産農作物						
なし	横浜市	3	1	<ul style="list-style-type: none"> クレソキシムメチル クロチアニジン クロルフェナピル チアメトキサム フェンプロパトリン フルバリネート 	<ul style="list-style-type: none"> 0.09 0.01 0.03 0.02 0.12 0.02 	<ul style="list-style-type: none"> 5 1 1 1 5 2.0
			1	<ul style="list-style-type: none"> アゾキシストロビン クレソキシムメチル クロチアニジン クロルフェナピル 	<ul style="list-style-type: none"> 0.12 0.09 0.01 0.03 	<ul style="list-style-type: none"> 2 5 1 1
			1	<ul style="list-style-type: none"> アセタミプリド クレソキシムメチル フェンプロパトリン ペルメトリン 	<ul style="list-style-type: none"> 0.03 0.02 0.01 0.04 	<ul style="list-style-type: none"> 2 5 5 2.0
さつまいも	横浜市	5	0			
ぶどう	横浜市	3	1	<ul style="list-style-type: none"> アゾキシストロビン クレソキシムメチル クロルフェナピル ペルメトリン 	<ul style="list-style-type: none"> 0.07 0.25 0.01 0.10 	<ul style="list-style-type: none"> 10 15 5 5.0
			1	<ul style="list-style-type: none"> アゾキシストロビン クレソキシムメチル 	<ul style="list-style-type: none"> 0.01 0.01 	<ul style="list-style-type: none"> 10 15

表1 残留農薬検査結果 (続き)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
			1	アセタミプリド	0.02	5
				アゾキシストロビン	0.13	10
				クロルフェナピル	0.02	5
				ペルメトリン	0.14	5.0
国内産農作物						
かぼちゃ	北海道	1	0			
こまつな	神奈川県	1	0			
キャベツ	岩手県	1	0			
輸入農作物						
パプリカ	オランダ	1	1	イミダクロプリド	0.01	3
キウイフルーツ	ニュージーランド*	1	0			

表2 農薬の検査項目及び検出限界(113項目)

農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)	農薬名	検出限界 (ppm)
BHC(α、β、γ及びδの和)	0.005	シハロトリン	0.01	フェンクロルホス	0.01
DDT(DDE、DDD及びDDTの和*)	0.005	シフルトリン	0.01	フェンスルホチオン	0.01
EPN	0.01	シペルメトリン	0.01	フェンチオン	0.01
アクリナトリン	0.01	ジメチルピルホス	0.01	フェントエート	0.01
アセタミプリド	0.01	ジメトエート	0.01	フェンバレレート	0.01
アゾキシストロビン	0.01	シメトリン	0.01	フェンピロキシメート	0.01
アルドリン及びディルドリン	0.005	スルプロホス	0.01	フェンプロパトリン	0.01
イソフェンホス	0.01	ダイアジノン	0.01	ブタクロール	0.01
イソプロカルブ	0.01	チアクロプリド	0.01	ブタミホス	0.01
イプロベンホス	0.01	チアトキササム	0.01	ブプロフェジン	0.01
イミダクロプリド	0.01	チオベンカルブ	0.01	フルジオキソニル	0.01
インドキサカルブ	0.01	チフルザミド	0.01	フルシトリネート	0.01
エスプロカルブ	0.01	テトラクロルピルホス	0.01	フルトラニル	0.01
エチオン	0.01	テトラコナゾール	0.01	フルバリネート	0.01
エトプロホス	0.005	テトラジホン	0.01	プロシミドン	0.01
エトリムホス	0.01	テブコナゾール	0.01	プロチオホス	0.01
エンドスルファン(α及びβの和)	0.005	テブフェノジド	0.01	プロパホス	0.01
エンドリン	0.005	テブフェンピラド	0.01	プロピザミド	0.01
オキサミル	0.01	テフルトリン	0.01	プロメカルブ	0.01
カズサホス	0.01	テフルベンズロン	0.01	プロモプロピレート	0.01
カフェンストロール	0.01	デルタメトリン及びトラロメトリン	0.01	ヘキサコナゾール	0.01
カルバリル	0.01	テルブホス	0.005	ヘキサフルムロン	0.01
クレソキシムメチル	0.01	トリアジメノール	0.01	ヘパタコル(エホキッドを含む)	0.005
クロチアニジン	0.01	トリアジメホン	0.01	ペルメトリン	0.01
クロマフェノジド	0.01	トルクロホスメチル	0.01	ペンコナゾール	0.01
クロルピリホス	0.01	パラチオン	0.01	ホサロン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	パラチオンメチル	0.01	ボスカリド	0.01
クロルフェナピル	0.01	ハルフェンプロックス	0.01	マラチオン	0.01
クロルフェンソン	0.01	ピフェントリン	0.01	マイクロブタニル	0.01
クロルフェンピルホス	0.01	ピペロホス	0.01	メチダチオン	0.01
クロルプロファム	0.01	ピラクロストロビン	0.01	メキシフェノジド	0.01
クロロクスロン	0.01	ピリダフェンチオン	0.01	メトラクロール	0.01
シアノフェンホス	0.01	ピリプチカルブ	0.01	メトリブジン	0.01
シアノホス	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	メピンホス	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	リニューロン	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	ピリミホスメチル	0.01	リンデン(γ-BHC)	0.002
ジクロラン	0.01	フェナリモル	0.01	ルフェヌロン	0.01
ジコホール	0.01	フェントロチオン	0.01		

※ DDTはp,p'-DDE、p,p'-DDD、o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

【農薬解説】

○アセタミプリド

『モスピラン』などの商品名で販売されている殺虫剤です。広く使用されている有機リン系農薬などに対して効きにくくなった多くの害虫に対しても効果があります。

平成23年度に実施した検査において、きゅうり(市内産)から検出された農薬です。

○アゾキシストロビン

『アミスター』などの商品名で販売されている殺菌剤で、多くの菌類に対し強い抗菌効果があります。

平成23年度に実施した検査において、きゅうり(市内産)及びブロッコリー(アメリカ産)から検出された農薬です。

○クレソキシムメチル

『ストロビー』などの商品名で一般的に販売されている殺菌剤です。特にうどんこ病、黒星病、べと病などに対して効果があるとされています。

○クロチアニジン

『ダントツ』などの商品名で販売されている殺虫剤です。半翅目害虫やアザミウマ目害虫などの各種害虫に高い殺虫効果がある一方で、蚕やミツバチなどに影響を及ぼす恐れがあることも知られています。

平成23年度に実施した検査において、きゅうり(市内産)、だいこん【葉】(市内産)及びなす(市内産)から検出された農薬です。

○クロルフェナピル

『コテツ』などの商品名で販売されている殺虫剤です。多くの野菜に適用があり、従来の殺虫剤に耐性がある害虫に対しても効果があります。

平成23年度に実施した検査において、きゅうり(市内産)から検出された農薬です。

○チアメキサム

『ビートルカップ』などの商品名で販売されている殺虫剤で、半翅目や鱗翅目等の広範囲な害虫に効果があります。

平成23年度に実施した検査において、なす(市内産)から検出された農薬です。

○フェンプロパトリン

『ロディー』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。広範囲の害虫(特にハダニ類)に対して有効的に作用する農薬です。

○フルバリネート

『マブリック』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。特にアブラムシ類に低濃度で安定した効果を発揮します。ミツバチに対する影響が少ないため、開花期の防除に利用できます。

○ペルメトリン

『アディオン』などの商品名で一般的に販売されている殺虫剤です。茶、果樹、野菜などの主要害虫の防除に使用される農薬です。

※参考文献

- ・社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2011年版
- ・農薬残留分析法研究班、最新農薬の残留分析法(改訂版)
- ・農林水産消費安全技術センター及び各農薬製造会社H.P.

【 検査研究課 微量汚染物担当 】

平成 23 年度 医動物・種類同定検査のまとめ（7～9 月）

医動物担当では、市民、各区福祉保健センター、各市場検査所、事業者などの依頼を受け、昆虫類を中心とした種類同定検査を行っています。昆虫類の種類を同定することによって、発生源、発生時期、人に対する害などが分かるため、効果的な対策を立てることにつながります。平成23年7月から9月の種類同定検査件数は、14件でした。内訳は昆虫類11件（ハチ目・コウチュウ目各3件、チョウ目2件、ハエ目・シロアリ目・トビムシ目各1件）、その他3件でした。

相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
浴室および台所から羽アリが大量に出てくる。	 有翅虫、黒色、約9mm	ヤマアリ亜科の 雌有翅虫 (ハチ目 ヤマアリ亜科)	本科は、温帯地方では大型で活発な種類を含み、地上活動性の種も多い。営巣場所は多くの種では地中である。アリ類は決まった時期、無数の有翅虫(雌雄成虫)が結婚飛行のため巣から飛び立つ。種類によって結婚飛行の時期は異なる。飛行を終えた雌雄成虫は、灯火、窓際に多数飛来し、不快害虫となることが多い。
ベランダ下の穴から、ハチが出入りしている。	 成虫、黒色、約10mm	ヒメハキリバチ (ハチ目 ハキリバチ科)	初夏から初秋にかけて営巣する。巣は、枯死した樹幹中の坑や竹筒などを利用する。本州に分布する。
戸建住宅の2階居間台所でアリが発生している。	 働き蟻、黒色、約2mm	ルリアリ (ハチ目 カタアリ亜科)	草地や林縁部の枯れ枝、朽木内、石の下などに営巣する。屋内に侵入し、電子機器の内部に入り故障を起こした例もある。関東以南に分布する。
庭で黒い虫が多数みられる。	 成虫、黒色、約8mm	ヒゲプトハムシダマシ (コウチュウ目 ハムシダマシ科)	成虫は石や落ち葉の下などに多く、また枯れ枝や薪にも集まる。また、灯火にも飛来する。幼虫は枯れ木の皮などを食べるといわれている。
石膏ボードを突き破って、虫がでてきた。	 成虫、黒色、約22mm	クロタムシ (コウチュウ目 タムシ科)	成虫は6～9月に発生する。体色は黒色で、青銅色あるいは銅色の光沢がある。また個体変化が多く、緑色、青色などを帯びることもある。幼虫は、マツ類、モミ類などの枯材を食べる。

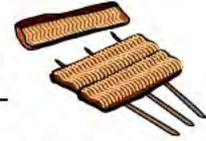
相談内容・発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
家屋内で虫がみられる。	 成虫、茶褐色、約2mm	タバコシバンムシ (コウチュウ目 シバンムシ科)	成虫は年2~3回発生し、9月~10月に発生ピークがある。食品を加害するのは幼虫のみで、その食性は広く、被害食品の種類は100種をこえる。パン、ビスケット、コーヒー、ココア、豆類、ドライフルーツなど多くの乾燥食品を加害する。
家の外壁に虫がみられる。	 幼虫、黒褐色、約7mm	ヤネホソバ (チョウ目ヒトリガ科)	成虫は年3回の発生。幼虫の食草は、地衣類などの苔で、屋根や屋根瓦、板塀、石垣などに生えた地衣類を食べる。糸をたらして人家内に侵入する。幼虫に触れると刺され痛みやかゆみを感じる。蛹で越冬する。
家の外壁や地面に、大量の幼虫がみられる。	 幼虫、灰黒色、約30mm	ハスモンヨトウ (チョウ目ヤガ科)	休眠しない移動性のガで、暖地では1年を通じて幼虫がみられる。ダイズ、サトイモなど多くの作物の害虫として知られる。幼虫の食草は80種類以上の報告がある。
7階建てのマンションの3階廊下に群飛している。	 成虫、黒色、約2mm	ナガサキニセケバエ (ハエ目 ニセケバエ科)	成虫は、ごみ溜めや糞、下水溝などの腐敗物から発生する。生存期間は2~5日と短い。雌成虫は、餌をとらず、羽化後24~30時間後には産卵を開始し、産卵すると間もなく死んでしまう。食品工場などの周辺で大発生することがある。
トイレの床付近で虫がみられる。	 職蟻、乳白色、約3mm	ヤマトシロアリ (シロアリ目 ミゾガシラシロアリ科)	ヤマトシロアリは、イエシロアリのように特別な塊状の巣は作らず、好適な生活環境を求めてコロニーが移動する。乾燥に弱く、常に湿った木材など多湿な場所を好む。
ログハウスのフローリングに虫がみられる。	 成虫、茶褐色、約2mm	アヤトビムシ科 (トビムシ目)	トビムシ目の多くは雑食性であり、落ち葉や腐植物、菌類などを食べる。多くは土壌の表面、落葉中に生息するが、樹上、水際などにみられることもあり、生活圏は極めて広い。腹部にある跳躍器で跳びはねることができる。

相談内容・ 発生状況等	写真 (状態、体色、大きさ)	同定結果	生態・その他
就寝中にかゆみを感じた。肌が赤くなり、小さな腫れがみられた。	 <p>成体、茶褐色、約0.5mm</p>	イエダニ (クモ綱ダニ目 オオサシダニ科)	イエダニの成体は長卵形で淡褐色である。主として、ドブネズミ、クマネズミを宿主とする。ときに、ヒトを吸血する。
2階居室内に糞がみられる。	 <p>糞、黒色、約12mm</p>	コウモリの糞	コウモリの糞の形態は、らせん状である。糞の内部には多数の昆虫片が認められた。
屋根の上に多量に糞がみられる。	 <p>糞、黒色、約5~15mm</p>	コウモリの糞	同上

【 検査研究課 医動物担当 】



魚介類中の動物用医薬品検査結果(その1)



平成23年6月に食品専門監視班が収去した、市内に流通するうなぎ8件及びうなぎ蒲焼4件について、抗生物質のテトラサイクリン系(3項目)及びクロラムフェニコール、並びに合成抗菌剤のマラカイトグリーン類(2項目)、ニトロフラン類(3項目)及びエンロフロキサシン等(28項目)について計37項目の検査を行いました。その結果、表に示すとおり、すべて不検出でした。

表 抗生物質、合成抗菌剤の検査結果

項目名	検査結果 (カッコ内は基準値)		検出限界
	うなぎ<8件>	うなぎ蒲焼<4件>	
【抗生物質】			
オキシテトラサイクリン	N.D. (0.2)	N.D. (*)	0.02
クロルテトラサイクリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.03
テトラサイクリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.02
クロラムフェニコール	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.0005
【合成抗菌剤】			
マラカイトグリーン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.002
ロイコマラカイトグリーン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.002
ニトロフラントイン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
フラゾリドン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
フラルタドン	N.D. (N.D.)	N.D. (N.D.)	0.001
エンロフロキサシン (シプロフロキサシンを含む)	N.D. (*)	N.D. (*)	0.005
オキシゾニック酸	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
オフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
オルビフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
オルメトプリム	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.02
クロピドール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
サラフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ジフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファキノキサリン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジアジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジミジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファジメトキシシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファドキシシ	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファピリジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメキサゾール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメキシピリダジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファメラジン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
スルファモノメトキシシ	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
ダノフロキサシン	N.D. (0.1)	N.D. (*)	0.01
チアンフェニコール	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
トリメプリム	N.D. (0.05)	N.D. (*)	0.02
ナリジクス酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ノルフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
ピリメタミン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.02
ピロミド酸	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01
フルメキン	N.D. (0.6)	N.D. (*)	0.01
フロルフェニコール	N.D. (0.2)	N.D. (*)	0.01
マルボフロキサシン	N.D. (*)	N.D. (*)	0.01

単位:ppm N.D.:不検出 *:「含有しない」

【 検査研究課 微量汚染物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 9月

《今月のピックアップ》

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が増加しています。
- レジオネラ肺炎の市内での報告が増加しています。
- 手足口病の流行は終息に向かっていますが、依然として11区で警報レベルです。
- RSウイルス感染症が例年より多く、今後の注意が必要です。

全数把握疾患

<コレラ>

O1稲葉型で、渡航歴等なく、感染原因・経路不明ですが、国内での感染が推定されています。

<細菌性赤痢>

4件の報告がありました。菌種はShigella sonnei 3件、Shigella flexneri 1件です。S. sonnei 3件のうち、1件は県外での喫食による外食チェーン関連食中毒の事例で、もう1件はインドネシア(バリ島)での感染です。残る1件とS. flexneriの1件は、ともに国内での感染が推定されています。

<腸管出血性大腸菌感染症>

16件の報告がありました(O157 VT1VT2が7件、O157 VT2が1件、O26 VT1VT2が2件、O26 VT1が1件、O74VT2が4件、O145VT2が1件)。同一家族内での発生が4件ありました。家庭でできる一般的な食中毒の予防法の6つのポイント(①新鮮な食材の購入 ②冷蔵・冷凍での食材保存 ③手洗いの励行、清潔な調理 ④肉・魚の十分な加熱 ⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる ⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる)を心がけましょう。

◆啓発用チラシ「O157に注意しましょう」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/o1572007.pdf>

なお、今月発生し、報道等で話題となった集団食中毒の起炎菌であるO148は、主に途上国への旅行者にみられる旅行者下痢症の主要な病原菌である毒素原性大腸菌の一つであり、感染症法の届出疾患には該当しません。腸管出血性大腸菌、毒素原性大腸菌などの下痢原性大腸菌感染症については下記をご参照ください。

◆下痢原性大腸菌感染症 http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k00-g45/k00_50/k00_50.html

<レジオネラ症>

肺炎型9件の報告がありました。5件が同一の市内会員制スポーツクラブを利用しており、施設の浴槽水等からレジオネラ属菌が検出されたため、当該施設は9月16日から営業を停止しています(9月29日現在)。現在、患者との菌の同一性について調査中です。他の事例については感染経路等調査中です。レジオネラ肺炎では、2～10日程度の潜伏期間の後、全身倦怠感、筋肉痛、頭痛、高熱等の症状を呈します。β-ラクタム系及びアミノ配糖体系抗生物質は無効で、マクロライド系、ニューキノロン系等が有効です。入浴施設の利用歴等の確認が重要です。

<アメーバ赤痢>

腸管アメーバ症4件の報告がありました。2件は日本国内での異性間性的接触、もう2件は国内での感染が推定されていますが、感染経路等不明でした。

<急性脳炎>

成人の単純ヘルペスウイルスによる報告がありました。

<後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)>

3件の無症候期、1件のAIDSの報告がありました。2件は国内での同性間性的接触、1件は国内での異

性間性的接触、1件は感染地域、経路とも不明でした。

<梅毒>

1件の早期顕性梅毒の報告がありました。国内での同性間性的接触によるものです。

<風しん>

成人例1件で、IgM 2.47と上昇を認め、診断されました。予防接種歴不明です。

※各感染症については、横浜市衛生研究所HPをご参考ください。

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/>

定点把握疾患

平成23年8月22日から9月25日まで(平成23年第34週から第38週まで。ただし、性感染症については平成23年8月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年 週一月日対照表

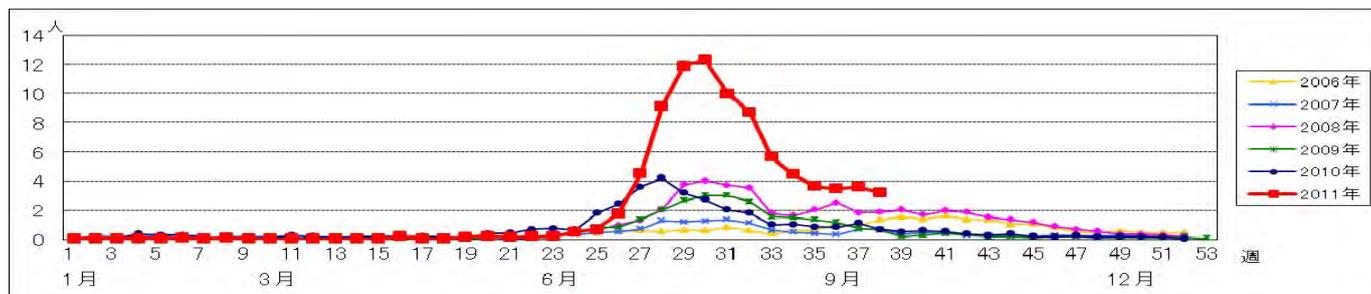
第34週	8月22日～28日
第35週	8月29日～9月4日
第36週	9月5日～11日
第37週	9月12日～18日
第38週	9月19日～25日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

<手足口病>

16年ぶりとなる横浜市内の大流行も終息に向かいつつあります。しかし、第38週でも依然として11区で警報レベルとなっています。横浜市全体ではピークの第30週12.30から第38週3.16と4分の1程度に減少していますが、35週以降やや横ばい状態となっているので、もう少し経過を注視していく必要があります。近隣の自治体でも第38週では、県域(横浜、川崎、相模原市除く)4.53、川崎市2.82、東京都3.39と減少傾向です。



静岡県¹⁾の報告によると、今年主流となっているCA6が検出された手足口病では、発熱率が高い、発疹が手掌や足底にはむしろ少なく、上腕・大腿部および臀部に高頻度に認め、口囲や頸部周辺にも認める等の特徴が指摘されています。CA6による手足口病では、罹患1～2か月後の爪甲脱落症も報告^{2),3)}されています。また、CA6感染による重症例も報告⁴⁾されているので、引き続き注意が必要です。(詳しくは下記ホームページをご参照ください。)感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児への感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

1) IASR<速報>2011年のコクサッキーウイルスA6型感染による手足口病の臨床的特徴—静岡県 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3784.html>

2) 浅井俊弥、手足口病に続発した爪甲脱落症。皮膚病診療 2011;33(3):237-240.

3) IDWR 第28号<注目すべき感染症> <http://idsc.nih.go.jp/idwr/kanja/idwr/idwr2011/idwr2011-28.pdf>

4) IDWR IASR<速報>心肺停止患者の咽頭ぬぐい液からのコクサッキーウイルスA6型(CA6)の検出と県内CA6の検出状況—鳥取県 <http://idsc.nih.go.jp:80/iasr/rapid/pr3793.html>

参考:衛生研究所 H.P.手足口病について <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html>

参考:衛生研究所 H.P.手足口病 臨時情報 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/hfmd/hfmd201131w.pdf>

参考:衛生研究所 H.P.手足口病 市民向けパンフレット <http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/hfmd201107.pdf>

<ヘルパンギーナ>

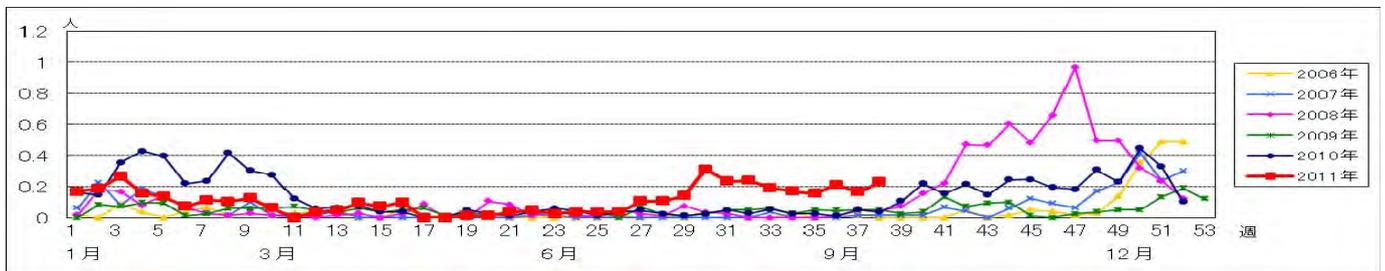
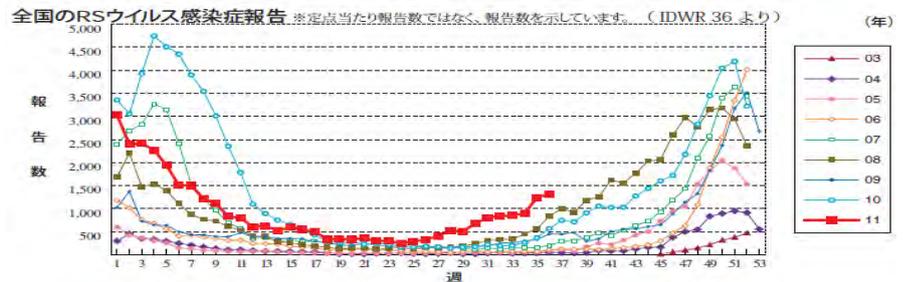
38週では緑区3.25で警報レベルですが、市全体では、0.76と落ち着いています。

<流行性角結膜炎>

38週では瀬谷区8.00で警報レベルとなりましたが、市全体では1.29です。

<RSウイルス感染症>

RSウイルス感染症は、例年冬にかけて流行しますが、今年は右のグラフのように全国で例年より増加が早い状況が認められています。昨年2010年の38週では定点あたり0.24でしたが、2011年38週では0.43となっています。最も多い都道府県は宮崎県2.64で、次に香川県2.47です。横浜市でも、下記のグラフのように、30週あたりから定点あたり0.20程度で推移しており、例年より多い状態が続いているため、今後の注意が必要です。



<性感染症>

8月では、性器クラミジア感染症は男性が22件、女性が7件でした。性器ヘルペス感染症は男性が7件、女性が4件です。尖圭コンジローマは男性10件、女性が2件でした。淋菌感染症は男性が18件、女性が1件でした。

<基幹定点週報>

マイコプラズマ肺炎が全国的に第24週頃から増加傾向にあり、注意が必要です。横浜市でも第22週から32週まではほぼ毎週数件ずつ報告され、33週4件、34週6件、35週1件、36週5件、37週2件と報告されています。8月は無菌性髄膜炎が31週に10～14歳で1件ありました。細菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報>

8月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症9件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【 感染症・疫学情報課 】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

<ウイルス検査>

9月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点33件(咽頭ぬぐい液27件、鼻腔ぬぐい液6件)、基幹定点3件(髄液2件、咽頭ぬぐい液1件)、眼科定点4件(眼脂4件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は上気道炎10人、口内炎8人、発疹症6人、発熱のみ4人、下気道炎2人、胃腸炎結膜熱、中耳炎各1人、基幹定点は無菌性髄膜炎2人、流行性耳下腺炎1人、眼科定点は流行性角結膜炎4人でした。

10月11日現在、小児科定点の上気道炎患者1人と口内炎患者1人、基幹定点の無菌性髄膜炎患者1人からコクサッキーB1型が、小児科定点の口内炎患者1人と発疹症患者2人からコクサッキーB16型が、小児科定点の口内炎患者1人からヒトパレコウイルス1型が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の上気道炎患者5人、口内炎患者1人、結膜炎患者1人からヒトメタニューモウイルス、口内炎患者2人と発熱のみの患者1人からコクサッキーAウイルス6型、口内炎患者1人からヒトメタニューモウイルスとコクサッキーAウイルス5型、発熱のみの患者1人からコクサッキーAウイルス10型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

8月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点から3検体、基幹定点から菌株受付が4件、定点以外の医療機関等からは19件あり、赤痢菌、腸管病原性大腸菌、腸管出血性大腸菌、サルモネラ、黄色ブドウ球菌、コレラ菌が検出されました。

咽頭炎等の検体受付は小児科定点から4件で、インフルエンザ菌が検出されました。定点以外の医療機関等からは25件で、*Legionella pneumophila*が1件検出されました。

(次ページに表)

表 感染症発生動向調査における病原体検査(9月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	9月			2011年1月～9月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌			3		3	7
腸管病原性大腸菌		1			7	
腸管出血性大腸菌			9			40
腸管毒素原性大腸菌					4	
パラチフスA菌					3	
サルモネラ	1	1	4	1	16	9
カンピロバクター						3
黄色ブドウ球菌			1		1	2
コレラ菌			1			2
クロストリジウム						1
不検出	2	2	1	5	62	5

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	9月			2011年1月～9月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌				7		
T1						
T3				4		
T4				4		
T12				8		
T25				2		
T28				4**		1
T B3264				10		
型別不能				2		
B群溶血性レンサ球菌						12
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌					5	16
バンコマイシン耐性腸球菌						15
<i>Achinomyces</i>						1
<i>Branhamella</i>				1**		
<i>Legionella pneumophila</i>			1			7
インフルエンザ菌	1			9**		
肺炎球菌				5**		
不検出	3	0	24	12	2	29

* : 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

** : 同一検体から複数菌検出

T(T型別) : A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 平成23年8月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 平成23年9月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成23年8月のアクセス件数、アクセス順位及び平成23年9月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については総務局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成23年8月)

平成23年8月の総アクセス数は、188,821件でした。主な内訳は、感染症59.1%、食品衛生12.9%、保健情報10.9%、検査情報月報6.8%、生活環境衛生2.4%、薬事1.2%でした。

(2) アクセス順位 (平成23年8月)

8月のアクセス順位(表1)は、第1位が「手足口病について」、第2位が「マイコプラズマ肺炎について」、第3位が「衛生研究所トップページ」でした。

第1位は、「手足口病について」でした。手足口病(hand,foot,and mouth disease:HFMD)は、口腔粘膜及び手や足等に現れる水疱性の発疹を主症状とした急性ウイルス性感染症であり、乳幼児を中心に主に夏季に流行する疾患です。

国立感染症情報センターの報告によりますと、今年の手足口病の定点当たりの報告数は、第28週(7月11日～7月17日)に11.0となり、1982年に感染症発生動向調査が開始されて以来最多の報告数となり、その後は第29週(7月18日～7月24日)以降減少が続いていますが、過去5年間の同時期と比較して、まだかなり多い報告となっています。

第2位は、「マイコプラズマ肺炎について」でした。

マイコプラズマ肺炎は、年間を通じて常にアクセス件数が多く、毎月上位にランクインしています。国立感染症情報センターの報告によりますと、マイコプラズマの定点当たり報告数は、第31週(8月1日～8月7日)は0.62、第32週(8月8日～8月14日)は0.70、第33週(8月15日～8月21日)は0.74と2週連続増加傾向でしたが、第34週(8月22日～8月28日)には0.65と一旦減少しました。しかし、過去5年間の同時期と比較すると、かなり多い報告が続いています。

第3位は、衛生研究所トップページでした。

表1 平成23年8月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	手足口病について	16,094
2	マイコプラズマ肺炎について	4,590
3	衛生研究所トップページ	4,070
4	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	2,732
5	サイトメガロウイルス感染症について	2,412
6	熱中症(熱射病、日射病)を予防しましょう	2,352
7	クロストリジウム・ディフィシル感染症	2,167
8	ポリオ(小児麻痺・急性灰白髄炎)について	1,933
9	感染症情報センター	1,840
10	サルモネラ感染症(食中毒)について	1,667

データ提供:総務局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成23年9月）

平成23年9月の問い合わせは、5件でした(表2)。

表2 平成23年9月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
サルモネラ感染症(食中毒)資料の転載許諾	1	感染症・疫学情報課
猫の置き餌について	1	動物愛護センター
食中毒の混合感染や複合感染の頻度	1	検査研究課細菌担当
狂犬病について	1	感染症・疫学情報課
妊娠初期のサルモネラ検出について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成23年9月）

平成23年9月に追加・更新した主な記事は、6件でした(表3)。

表3 平成23年9月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
9月 2日	狂犬病について	更新
9月 5日	インフルエンザ入院サーベイランスがスタートします	追加
9月 6日	感染症に気をつけよう(9月号)	追加
9月15日	髄膜炎菌性髄膜炎について	更新
9月16日	熱中症情報	更新
9月16日	ヒトパピローマウイルス(HPV)と子宮頸癌等について	更新

【 感染症・疫学情報課 】